



“古今東西のリプロダクションを社会学から捉える”

教授 白井 千晶 (家族社会学・医療社会学)

1970年8月愛知県生まれ、2001～2003年度早稲田大学助手、2003年早稲田大学大学院博士課程単位取得満期退学、複数の大学等の非常勤講師、2010～2012年度日本学術振興会特別研究員 (RPD)、2014年4月静岡大学准教授、2016年同教授
2022年より第5期研究フェロー

研究概要

リプロダクションを縦軸、横軸から社会的に研究しています。ここでいうリプロダクションとは、マクロ的に言うと人口の再生産、ミクロ的に言うと産み育ての事です。産み育てと言っても、性、避妊や家族計画、人工妊娠中絶や流産、不妊、生殖技術、妊娠、出生前検査、出産、産後などを含む様々な局面があります。

リプロダクションは、時代によって、社会によって、まったく異なります。私たちが当たり前と思っていることは、当たり前ではありません。女性が一人で産んだり、家族や近隣の人を取り上げた時代。介助者は産婆、助産婦、助産師、医師になり、場所も、テクノロジーも、身体観や生命観も、家族観や家族のあり方も変化しています。

縦軸だけでなく横軸によっても多様です。不妊への対処、中絶に対する考え方、「血のつながりの捉え方」、誰が誰をどのように育てるか、ケアのありよう、ジェンダー役割、暮らし方など。

これらをインタビュー、資料、量的調査など、様々な方法で研究しています。



メッセージ

何でもそうかもしれませんが、研究テーマを切り口に見る社会はとても面白く、社会の縮図のように感じます。リプロダクションから古今東西を見ると、パートナーシップ、身体観や生命観、ジェンダー、家族、地域社会、テクノロジーや医療、施策や国家、様々なことが写し取れて、広がりや深まりの魅力を感じています。

これも何でもそうかもしれませんが、いま生きている社会と関わっているという実感をもてる醍醐味もあります。私自身の近年の社会的活動としては、養子縁組や里親、施設養護など社会的養護に関する活動、子育て支援や社会的養育の事例収集、出生前検査、妊娠出産環境や人工妊娠中絶のあり方を考える市民活動、障害やセクシュアルマイノリティなどと家族形成の今後を問うプロジェクト、卵子提供で親になった人のピア活動、様々なロビー活動などを行っています。教育研究が社会的活動につながるだけでなく、社会的活動自体がフィールドワークという研究にもなっています。生活や人生そのものが研究なのかも？研究が人生なのかも？毎日が楽しく、生きている実感ももてて、研究は本当にお勧めです。

【主な研究業績】

外部資金獲得状況：

科学研究費補助金基盤B「アジアにおける出生前検査と障害をめぐる実証的研究」(2020 - 2023年度)、科学研究費補助金基盤B「現代アジアのリプロダクションに関する国際比較研究：ジェンダーの視点から」(2017 - 2019年度)、基盤C「第三者が関わる生殖技術に起因する課題の当事者研究：卵子提供を受けた母親を中心に」(2014 - 2018年度)、ほか

委員等：

静岡県社会福祉審議会委員 (児童福祉専門分科会 長代理、子ども・子育て支援部会、児童処遇特別部会、児童福祉専門部会、児童虐待検証部会 各部会長)、静岡県地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会・委員、富士宮市女性応援会議アドバイザー、静岡市子どもの貧困対策推進会議委員。静岡県婦人保護施設評価委員 (2022年4月現在)

国内外の学会誌編集等：

養子と里親を考える会理事・編集委員長、日本ファミリーホーム協議会編集委員

著書・論文：

『アジアの出産とテクノロジー：リプロダクションの最前線』(編著、勉誠出版、2022年)、『フォスター：里親家庭・養子縁組家庭・ファミリーホームと社会的養育』(著、生活書院、2019年)、『養子縁組の再会と交流のハンドブック』(監訳・訳、生活書院、2019年)、『産み育てと助産の歴史：近代化の200年をふり返る』(編著、医学書院、2016年)、『不妊を語る：19人のライフストーリー』(海鳴社、2012年)、『不妊と男性』(共著、青弓社、2004年)、『子育て支援 制度と現場』(共編著、新泉社、2009年)